

李燾『説文解字五音韻譜』標目の韻目

白田真佐子

一

説文会（お茶の水女子大学中国文学研究室内）で段玉裁（字は若膺、江蘇金壇の人、一七三五—一八一五）『説文解字注』三十巻に接して十年、あるとき気づいたことは、段注の中に陳奐（字は碩甫、江蘇長洲の人、一七八六—一八六三）『説文部目分韻』一卷が「付刻」されてはいるものの、段注の解説には一度も利用していないということであった。この素朴な疑問に端を発して陳奐『説文部目分韻』の構成と内容について一文を記したことがある（「陳奐『説文部目分韻』考」⁽¹⁾）。以下、「前稿」という。陳奐『説文部目分韻』の原型が李燾（字は仁甫、眉州丹棱の人、一一一五—一一八四）『説文解字五音韻譜』十二巻（以下、『五音韻譜』と略す）にあり、前稿でも陳氏の表と比較しつつ、かなり言及した。その時点で『五音韻譜』に関して明らかかな点があったが、記述の都合上、前稿には盛り込めなかつたものもある。それは、『五音韻譜』の韻目に関する点である（前稿注27参照）。

『五音韻譜』の部首の配列について、福田襄之介氏は『五音

李燾『説文解字五音韻譜』標目の韻目

韻譜』が「韻目別形式」をとることを、頼惟勤氏は「二百六韻の順」であることを、阿辻哲次氏は「五百四十の部首字を韻書の形式に従って配列」していることをそれぞれ指摘する⁽²⁾。以上の指摘では『五音韻譜』の韻目の具体的な点までは分らないところもある。例えば、『五音韻譜』の標目を見ると、四声には分けてあるが、表面的には韻目が記されていない。この「表面的には記されていない韻目」が難問である。本当に韻目別に部首が配列してあるのか、だとすれば韻目は省略されているのか否か等、疑問は生じる。これらの疑問を解決していくのが、本稿の目指すところである。

二

李燾『五音韻譜』の韻目については、前稿で取り上げた陳奐『説文部目分韻』の自序と表からも手がかりが得られるが、今ここではそれを伏せ、『五音韻譜』自体から手がかりを探してみることにする。李燾自身の後序は原行の『五音韻譜』には見えず、手近に見ることのできるものとしては『許学考』巻二十五に掲載されているものがある⁽³⁾。この『許学考』により、とりあえず次のような手がかりを得ることができる。すなわち、「蓋則用徐氏舊譜、參取『集韻』卷第、起東終甲、偏旁各以形相從、悉依『類篇』。」という一節である。これにより、『五音韻譜』標目所載の部首（正確に言えば「部首相当字」であるが、以下「部首」と単に言うこともある）と『集韻』を照らし合わせ、『五音韻譜』韻目表⁽⁴⁾を作製し、本稿に後付した。い

わば李燾のしごとを追試した訳で、『五音韻譜』の部首は、『集韻』に現われる順に配列されていることが証明できる。例えば、上平声、東から宮までの部首は平声東韻、从から凶までの部首は鍾韻というように、同一韻目ごとに部首がまとめられている。

次に、李燾が『集韻』によって部首を配列した理由を考えてみよう。許慎は自己の世界観と宇宙観によって五百四十の部首を配列した。(5) このような部首の配列の方法は、実用面から言えば非常に検索しにくいものであったといえる。二百六韻を暗記している中国の文人に、部首を韻によって並べかえる発想が生まれても当然であろう。実際に部首を韻別に並べかえるとすれば、何かの韻書の助けを借りる必要がある。それには例えば、『広韻』が考えられる。しかし、李燾は『広韻』ではなく『集韻』を用いた。その理由は、『広韻』の所収字二万六千一百九十四よりも『集韻』の所収字五万三千五百二十五の方が多いうことであろう。また、『集韻』には『説文』からの引用が多いことも言っておかなければならない。この点については、例えば黄桂蘭氏の指摘によると、『集韻』所引の『説文』は計九千二百四十一字（大徐本新附字を除く）である。(6) それでは李燾が韻目を省略してしまったのは何故か。その理由は、『五音韻譜』標目では『説文』所収の字すべてが対象ではなく、部首五百四十のみを列挙するだけなので、簡略化を計ったものと推定される。

三

さて、李燾『五音韻譜』標目の韻目を復元する試みは、すでに先人によってなされている。胡重『説文字原韻表』二巻(7)はその忠実な復元と評価してよい。筆者は胡重の表とは別に、『五音韻譜』の部首を『集韻』と照合させ、韻目一覧表（『五音韻譜』韻目表）を作製したが、これは胡重の表とおおむね一致する。この一覧表と胡重の表とが韻目の上で一致しないのは、次の三箇所である。

胡重の表 『集韻』

①上声	五十儉	五十琰
②上声	五十五范	五十五范
③去声	五十七驗	五十七驗

①と②の例については、張炳翔『説文字原韻表』跋(8)にも指摘されている。②と③の例は誤刻と考えられる（但し、驗は驗の俗字でもある）。①の場合、秀水金氏月香書屋刊本では「廿八儉、五十」に作り、平水韻「儉」韻の次の『集韻』の韻目が脱落しており、『許学叢書』に刻入する際に、「五十」の後に「儉」が添加されたのであろう。(9)

この三例を除けば、胡重の表は『集韻』で韻目を復元しており、胡氏の表の先駆としての意義がみてとれる（但し、平声出韻のみ、字体を之韻に改めている）。さらに、胡重の表の見識の高い点は、平声・上声・去声・入声を四声相配するよう縦に並べていることである。また、『集韻』の韻目のほか、その上

に平水韻も併記し、その部首が『説文』第何篇に現われるのかも記されている。但し、李燾が付けた部首の通し番号が削除されていることは、『五音韻譜』の韻目表の代用とするには不便である。また、四声相配の結果、例えば平声を検索するとき、最初から最後まで見るとすれば全部で二十三葉となり、表全体が簡便であるとは言いがたい。このように胡重の表は、『五音韻譜』の韻目を『集韻』によって復元してはいるものの、これはこれ自体で『説文』部首と二百六韻に関する著作となつていると言える。

四

そもそも筆者自身は陳奐『説文部目分韻』から逆に『五音韻譜』の韻目を調べることになつたのであるが、陳氏の表も『五音韻譜』の韻目表の代用にはなるといつてよいであろう。但し、前稿でも明らかのように、陳奐は韻目を『広韻』で付け、平水韻によつているところもあるので、韻目にずれの生じる点があるのは当然である。これは前稿でも言及したが、張炳翔も次のように指摘する（『説文字原韻表』跋）。

吾郷陳碩甫先生嘗編『説文部目分韻』、與是表大旨相同、而陳氏所編之韻頗有岐異。如來・才在灰韻(①)、轟在眞韻(②)、舜・盾・朮・凶・孔・印六字均在震韻、而二十七恨之寸字亦在震韻也(③)。半・爨・且三字在翰韻(④)、冥在青韻(⑤)、矛・姝・リ三字在尤韻(⑥)、欠在梵韻(⑦)、影在銜韻(⑧)、與是表不同盡。此表依『集韻』而

李燾『説文解字五音韻譜』標目の韻目

陳則不盡依『集韻』也。(引用文中の①～⑧は筆者による)①～④の例は前稿(一〇五～一〇六頁)ですでに述べたが、陳奐が平水韻によつて韻をまとめているものである。但し、張炳翔は例のみ提示し、原因は述べない。⑤は前稿(注13)でふれた。また、『五音韻譜』韻目表「では部首の「起止」のみ記したので、表中には現われないが、「冥」(下平声庚韻、55番の部首)は『広韻』では平声青韻である。⑥と⑦の例は陳奐が原則として『広韻』によつて韻目を付けているものである(本稿次節も参照)。⑧の例は前稿(一〇〇～一〇二頁)で言及したが、陳奐が反切を付け換え、その結果、韻目が変更となつているのである。

以上の点を承知しておけば、陳奐『説文部目分韻』は段玉裁『説文解字注』に付刻されており、段注は現在では影印本でたやすく見ることができるので、当座の用には便利である。

五

ここで、『五音韻譜』の標目を『広韻』で付けた場合を考えてみたい。前稿でも次のように指摘した(一〇五頁)。

『集韻』主義を採ると仮定される『五音韻譜』、そしてその『五音韻譜』の通りに原則として部首を並べながら、韻目は『広韻』方式で付ける『説文部目分韻』との間に、一種の「ずれ」が生じるのは当然と言える。

この文のうち、「と仮定される」という一句は、本稿で述べてきたことにより削除してもよいが、具体的に「ずれ」がどのよ

うに現われるのであろうか。それは、本稿前節で引用した張炳翔の跋にも二例見られる(⑥・⑦)。そのほか、五百四十の部首についてすべて調べると次のようになる。

(一) 韻目用字の字体が異なる場合¹¹⁾

これらの実例は『五音韻譜』韻目表¹²⁾で『広韻』の字体を(一)に入れて示した。

(二) (一) 以外の理由で、韻目用字が一致しない場合

これは『五音韻譜』韻目表¹²⁾にへくで示した例である。

このうち韻目次序に関する異同は、次の①③の三例である。

部首	『集韻』	『広韻』
① 下平声	89 多 90 影	二十八 銜 二十七 銜
② 去声	82 欠	五十七 驗 六十 梵
③ 入声	119 甲	三十三 狎 三十二 狎
④ 上声	63 ㄥ	十七 準 十六 軫

②の例は『広韻』『集韻』ともに反切は去剣切である。④の例では、『広韻』余忍切、『集韻』以忍切であり、同音とみてよい。韻目次序に関する異同に準じるものとして、この④も挙げしておく。

また、次の⑤⑦の三例は『広韻』『集韻』がともに二百六韻でありながら、分韻が微妙に異なっていることを示している。この三例に準じるのは、『五音韻譜』韻目表¹²⁾にへくで示した例である(前稿一〇五〜一〇六頁も参照)。

部首 『集韻』 『広韻』

⑤ 下平声	67 丘 72 雉	十八 尤
	73 矛	十九 侯
⑥ 上声	74 攸 75 4	二十 幽
	139 焱 140 𠂔	五十 琰
	141 𠂔	五十二 儼
		五十 琰
⑦ 入声	1 哭 15 白	一 屋
	16 業	二 莪
		一 屋

以上のような点が、『五音韻譜』の韻目を『広韻』で付けた場合、『集韻』と付けた場合との「ずれ」となって現われると言える。

六

李燾『五音韻譜』標目の韻目は省略されてはいるものの、実は『集韻』によって付いている。それを復元する試みは、胡重によつてなされているが、胡氏の表はこれ自体独立のものと言つてもよい。陳奐『説文部目分韻』は、『五音韻譜』の韻目表としては「正確」とは言えないが、容易に見られるのは便利である。

『五音韻譜』の韻目に関しては、許巽行『説文分韻易知録』五巻にも言及したいが、これは別の機会に譲るとして、併せて『説文』の部首に関する前近代の著作については、目録、解題、術語辞典等では個々の著作自体については分かつて、それらの関係については研究していく必要がある。筆者は以前諧声表の系統づけという音韻学研究を試みたが、これと同様、部首に

関する著作の系統づけというしごと、伝統的な文字学研究のうえで必要であるといえよう。

注

- (1) 『東方学』第八十四輯、一九九二年。
- (2) 福田襄之介『中国字書史の研究』、明治書院、一九七九年、三三三頁。頼惟勤(監修)『説文入門』、大修館書店、一九八三年、四五頁。阿辻哲次『漢字学——説文解字の世界』、東海大学出版会、一九八五年、二二三頁。
- (3) テキストは子術宣排印本(台湾：華文書局、一九七〇年影印)による。なお、「新編許氏説文解字五音韻譜序」(魏了翁『鶴山渠陽経外雜鈔』卷一、『叢書集成初編』所収本へ上海商務印書館、一九三七年影印)では「蓋」の字がなく、「終甲」を「従甲」に作る。なお、李燾の序については次掲文献参照のこと：京都大学人文科学研究所「清代経学の研究」班「顧炎武『音論』訳注」、『東方学報』京都第五十一冊、一九七九年、六三六頁、注(4)。
- (4) 論述の必要上、特に掲載する。この表では、同一の韻目に属する部首の「起止」のみ記す。部首の前の算用数字は、李燾が付けた部首の通し番号である(もとは漢数字)。
- (5) 例えば、高明「論説文解字之編次」(『高明小学論叢』、台湾：黎明文化事業股份有限公司、一九七一年、九三頁)

李燾『説文解字五音韻譜』標目の韻目

に次のようにある：「所謂『其建首也、立一爲始……畢終於亥、知化窮冥』者、言五百四十部之部首、始一終亥、由此可以探索宇宙世界之一切也。」また、阿辻哲次『説文解字』の構成(注2前掲文献)の特に一三六一—一三八頁参照。

- (6) 『集韻引説文考』、台湾：文史哲出版社、一九七三年、二—三頁。
- (7) 嘉慶十六年(一八一一年)秀水金氏月香書屋刊本。また、『許学叢書』所収本。それぞれ、表は全二十九葉、全二十三葉。本稿で主に用いたテキストは『叢書集成初編』所収本(上海商務印書館、一九三六年影印)で、これは『許学叢書』所収本によっている。なお、胡重(字は菊圃)は浙江秀水の人。
- (8) 張炳翔は江蘇長洲の人で、『許学叢書』の校讎者。『説文字原韻表』跋(光緒十一年(一八八五))は本来『許学叢書』に付されたものである。
- (9) テキストは注(7)参照。
- (10) 注(7)参照。
- (11) 『広韻』『集韻』の韻目の異同については、次掲拙稿を参照されたい：「『広韻』『集韻』の韻目の異同について」、中国語学研究『開篇』七、一九九〇年(尉遲治平訳「論『広韻』『集韻』韻目之差異」、『音韻学研究通訊』十六、一九九二年)。
- (12) 注(11)に同じ。

(13) 目録、解題については、前稿注(4)・(5)参照。術語辞典には例えは、許嘉璐主編『伝統語言学辞典』、河北教育出版社、一九九〇年、がある。

『五音韻譜』韻目表

1 上平声

『五音韻譜』部首	韻目
1 東 8 宮	一 東
9 从 11 凶	三 鍾
12 囟	四 江
13 支 19 危	五 支
20 佳 26 眉	六 脂
27 之 35 丌	七 止 (之)
36 非 41 口	八 微
42 魚 47 昇	九 魚
48 于 55 爻	十 虞
56 麤 59 烏	十一 模
60 齊 64 兮	十二 叁 (齊)
65 乖	十四 皆
66 嵬 67 自	十五 灰
68 來 69 才	十六 哈
70 申 79 民	十七 眞
80 轟 82 巾	十八 諄

〈*〉

2 下平声

『五音韻譜』部首	韻目
1 先 5 玄	一 先
6 次 14 員	二 僊 (仙)
15 肉 18 垚	三 蕭
19 爻 24 巢	五 爻 (肴)
25 高 28 夬	六 夬 (豪)
29 戈 32 它	八 戈 〈*〉
33 麻 39 瓜	九 麻
40 羊 47 王	十 陽
48 倉 51 黃	十一 唐
52 庚 59 兄	十二 庚
60 叟	十三 耕
61 晶	十四 清
83 岫	十九 臻
84 文 86 雲	二十 文
87 斤 90 杖	二十一 欣
91 叩 92 言	二十二 元
93 蝮 95 豚	二十三 魂
96 千 98 丹	二十五 寒
99 丸 104 崙	二十六 桓 (桓)
105 艸	二十七 刪
106 山 107 虺	二十八 山

3 上声

『五音韻譜』部首

- 1 升
- 2 只 11 毀
- 12 旨 23 匕
- 24 止 33 己
- 34 尾 37 鬼
- 38 鼠 43 予
- 44 羽 46 丷
- 47 土 55 午
- 56 米 59 匚
- 60 廌

韻目

- 一 升
- 二 腫
- 四 紙
- 五 旨
- 六 止
- 七 尾 (尾)
- 八 語
- 九 噴 (麤)
- 十 姥
- 十一 齊
- 十二 解 (蟹)

- 62 青 64 冂
- 65 欠
- 66 能
- 67 丘 72 隹
- 73 矛
- 74 攴 75 亅
- 76 心 83 琴
- 84 男
- 85 三 86 甘
- 87 鹽 88 炎
- 89 彡 90 彡

- 十五 青
- 十六 蒸
- 十七 登
- 十八 尤
- 十九 疾 (尤)
- 二十 幽
- 二十一 侵
- 二十二 覃 (覃)
- 二十三 談
- 二十四 鹽
- 二十八 銜 (二十七 銜)

- 129 厚 133 斗
- 114 有 128 丑
- 111 竝 112 壬
- 110 井
- 109 龜
- 105 丙 108 囧
- 104 躡
- 98 象 103 上
- 94 馬 97 瓦
- 93 火
- 90 可 92 大
- 84 万 89 艸
- 82 卯 83 爪
- 80 小 81 爻
- 78 鳥 79 了
- 73 舛 77 珪
- 70 丐 72 勹
- 69 卯
- 68 厂
- 66 彙 67 丨
- 65 夂
- 64 匕
- 63 彡
- 61 亥 62 乃

- 十五 海
- 十七 準 (十六 軫)
- 十九 隱
- 二十 阮
- 二十一 混
- 二十三 旱
- 二十四 緩
- 二十七 銑
- 二十八 獮 (獮)
- 二十九 筱 (篠)
- 三十 小
- 三十一 巧
- 三十二 皓
- 三十三 哿
- 三十四 果
- 三十五 馬
- 三十六 養
- 三十七 蕩
- 三十八 梗
- 三十九 耿
- 四十 靜
- 四十一 迴
- 四十四 有
- 四十五 厚 (厚)

134 品 ~ 136 歛 四十七覆 (覆)
 137 束 ~ 138 号 四十八感
 139 焱 ~ 140 符 五十琰
 141 广 五十二儼 (琰)
 142 口 五十五范

4 去声

『五音韻譜』部首

1 瘳	韻目
2 用 ~ 4 共	一送
5 颯	三用
6 束	四降
7 至 ~ 15 比	五寘
16 異	六至
17 未 ~ 19 无	七志
20 去	八未
21 句 ~ 24 壹	九御
25 步 ~ 28 瓠	十遇
29 弟 ~ 30 系	十一莫 (暮)
31 彙 ~ 34 俯	十二霽
35 大 ~ 38 ㄥ	十三祭
39 辰 ~ 40 梳	十四杰 (泰)
41 丰	十五卦
42 未	十六怪
	十八隊

43 隶	十九代
44 刃	二十一震
45 舜 ~ 49 凡	二十二稗
50 寸	二十七悵 (悵)
51 印	二十二稗
52 軟	二十八翰
53 半 ~ 55 且	二十九換
56 采	三十一禡
57 見 ~ 59 片	三十二霰
60 面	三十三綫 (線)
61 覷	三十五笑 (笑)
62 教 ~ 63 兒	三十六效
64 号 ~ 66 冂	三十七号
67 左	三十八箇
68 臥	三十九過
69 而 ~ 71 七	四十禡
72 放 ~ 73 鬯	四十一漾
74 語	四十三映
75 正	四十五勁
76 又 ~ 77 聿	四十九宥
78 菁 ~ 81 豆	五十候
82 欠	五十七驗 (六十梵)

5 入声

『五音韻譜』部首

- 1 哭 15 臼
- 16 糞
- 17 束 21 玉
- 22 角 24 辛
- 25 日 31 乙
- 32 出 34 聿
- 35 勿 37 市
- 38 月 42 丿
- 43 去 44 骨
- 45 尸 47 大
- 48 火 49 尢
- 50 勹 54 冏
- 55 冂 60 丿
- 61 舌 64 桀
- 65 龠 70 谷
- 71 冫
- 72 白 75 乳
- 76 麥 80 晝
- 81 夕 89 辟
- 90 糸 94 彌
- 95 食 101 頤
- 102 北 104 克

韻目

- 一屋
- 二沃
- 三燭
- 四覺
- 五質
- 六術
- 八勿 (物)
- 十月
- 十一沒
- 十二曷
- 十三末
- 十四黠
- 十六屑 (屑)
- 十七薛 (薛)
- 十八藥
- 十九鐸
- 二十陌
- 二十一麥
- 二十二咍 (昔)
- 二十三錫
- 二十四職
- 二十五德

屋

- 105 習 112 皂
- 113 弁 115 龕
- 116 奎 117 聿
- 118 劼
- 119 甲

- 二十六緝
- 二十七合
- 二十九葉
- 三十帖 (帖)
- 三十三狎 (三十二狎)